

# ビール

## 沖縄のビールの歴史は

沖縄におけるビールの歴史は、本土より古いという説もあります。日本人がビールと出会った最初の記録は、江戸時代にオランダ人から聞いた海外事情が書かれた『和蘭問答』(1724年刊)にあるそうですが、沖縄では、本土が鎖国をしていた間も、中国との間に進貢船が行き来していました。そのため、中国や東南アジアとの貿易の歴史が古く、本土より早い時期からビールが入っていたのではないかと考えられるのです。しかし、残念なことに、これらを記録に残したものはなく、一番古い記録としては、1827年にイギリスのプロッサム号が沖縄に来た際に、宴において瓶詰め黒ビールを振舞ったというものが残っているようです。

## 『オリオン』の名称は公募で決まった

現在、沖縄で最大のシェアを占めるオリオンビールは、米軍施政権下にあった昭和34年に生まれました。本土の神武景気などの影響を受け、好景気を迎えていた沖縄において、将来の自立経済を確立するためのコアとなる産業として、ビールの製造販売が始められたのです。『オリオン』の名称は、一般公募により決まったもので、星座のオリオン座から命名されました。オリオン座は南の星であり沖縄のイメージにマッチしていること、星は人々の夢や憧れを象徴すること、当時沖縄を統治していた米軍の最高司令官の象徴が「スリースター」だったことなどが選定の理由となったそうです。沖縄の気候に合った爽快な喉ごしとマイルドな味わいが特徴のビールです。

## 最近では地ビールも

他にも、最近では、地ビールもあります。それぞれの酒造所毎に個性の異なる数種類のビールが造られています。このうち、石垣島の地ビールは、日本最南端の地ビールとしても知られています。



恩納村 万座ビーチ

And more...

# その他

沖縄の特産品を使ったお酒で有名なものとしては、地元のサトウキビを使ったラム酒、パイナップルやパッションフルーツといったトロピカルフルーツを使ったワインがあります。また、ハブを漬け込んだハブ酒というものもあります。ベースのお酒には泡盛を使うことが多いですが、ラム酒を使うものもあるようです。これらのお酒も、沖縄ならではのものといえるでしょう。



コラム

## 沖縄の酒の愉しみ 田崎真也

沖縄県には、ほぼ毎月のように出かけてゆく。そんなおり、僕の沖縄での酒の楽しみかたは、まず伝統的な料理をいただける店で、ゴーヤーチップスや島ラッキョウの天ぷらかなにかと、冷えたオリオンの生ビールを流し込んで爽快感を愉しみ、沖縄に居ることを実感する。次いで、島魚の刺身を醤油と酢、島唐辛子のタレでいただき、軽めの風味の泡盛の新酒をオン・ザ・ロックで味わう。それが終わると、テビチやラフテーを着にずっと個性豊かな泡盛の新酒に換えて、相性を愉しむ。

そして場所を移し、伝統的には始めに飲む「クースー」を、あえて食後に、43度の原酒をストレートでチビチビなめるように、ゆっくりと奥深い風味と素敵な時間を愉しむ。

ふつうならば、ここで終了!となるところだが、沖縄の夜はまだまだ長い。今度はオシャレなバーに移動し、南大東島で造られているホワイト・ラムが棚に並んでいけば、残念ながら県内でもまだまだ少ない)それをベースに、沖縄産のトロピカルフルーツのリキュールやワイン、フレッシュジュースなどを使った創作カクテルを数杯愉しむ。

さらに、まだまだ...

島歌の民謡酒場に立ち寄り、歌い、踊り、そして、再びオリオンビールを呷って?リフレッシュ。

でも、リフレッシュのつもりが、翌日は二日酔い。最後まで飲んで瞬間のリフレッシュ感を取るか、それとも止めて二日酔い回避を選ぶか。いつも究極の選択を迫られる。

結局、僕はいつもリフレッシュを選んでいる。そして、東京に戻り、また沖縄に行く日を心待ちにしている。



田崎真也(たさき・しんや)  
Shinya Tasaki

1958年(昭和33年)3月21日生  
東京都出身  
1995年、第8回世界最優秀ソムリエコンクールで日本人として初めて優勝し、世界一の座につく。

「ワインは、覚えてから楽しむものではなく、楽しんでから覚えるもの」をコンセプトに田崎真也ワインサロンを主宰。講演、執筆活動やテレビ出演に加え、25歳以下の若手ソムリエを対象としたソムリエコンクールを主催するなど幅広く活動。ワインの楽しさを国内に広めた第一人者であり、日本国内のみならず、世界でも有名なソムリエ。